ＪＡくるめ西部土づくりセンター

環境保全型農業や有機農業の推進に向けて

畜産堆肥による安全な土づくりを推進し環境に配慮した安全な農産物を

安武町・ＪＡくるめ西部土づくりセンター

県内最大の酪農地域の利点を活かした安全な土づくり

久留米市は、筑後川河川敷で育てた牧草を利用する地域の利点を活かして、古くから畜産業が盛んな地域です。

現在、市内には３４００頭を超える乳用牛が飼養されており、県内最大の生乳の生産を誇っています。

家畜の排せつ物は、これまでも堆肥化され、米麦などの肥料として活用されてきましたが、より効率的に堆肥を生産し、畜産資源を活用した安全な土づくりを進めるために、ＪＡくるめでは安武町に完熟堆肥を製造する施設「西部土づくりセンター」を整備しました。

ＪＡくるめ西部土づくりセンター

耕畜が連携した環境保全型農業を推進

家畜排せつ物は、発酵させて堆肥に加工すれば、天然由来の有用な有機質肥料とすることができます。

市内の酪農家の多くは、自ら整備した一次発酵処理施設でふん尿を一次処理したものを、西部土づくりセンターに搬入し、完熟堆肥に加工しています。

完熟堆肥は、米麦を栽培する農家（耕種農家）が、主に水田用の肥料として活用しています。

堆肥の活用は、化学合成肥料の投入量が抑制でき、地力増強による増収、高品質米の生産、追肥の軽減などの効果があると言われており、消費者の安全志向、環境配慮志向の高まりに対応した環境保全型農業として、市やＪＡでは、積極的に推進しています。

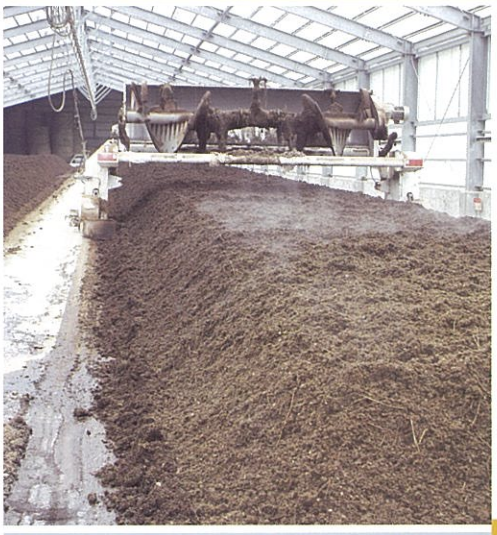
また、耕種農家が米麦を生産する際に発生する「わら」は、畜産農家が、家畜の餌や敷きわらとして有効に利用しています。

このような「耕」と「畜」の異なるものを生産する農家が連携することを耕畜連携と呼んでおり、環境に配慮した資源循環型の農業のため、さらなる連携強化が必要となっています。

土づくりと化学肥料・農薬の使用低減を行うエコファーマー

畜産堆肥を使った土づくりや化学合成肥料や農薬の使用量を低減する取り組みを行う農家を、福岡県では、エコファーマーとして認定しています。

20年12月現在、本市では、２８２名の農業者がエコファーマーの認証を受けて、リーフレタス、大根、カブ、サラダ菜、キュウリ、トマト、ネギ、春菊、アスパラガスなどの野菜、ナシ、ブドウ、モモなどの果物、米など環境に配慮した安全で安心な農産物を生産しています。



（写真上）久留米市内では、58戸の農家が乳用牛を飼養し、生乳を生産しています。写真は荒木町の永田牧場。

（写真中）畜産農家数戸が共同で整備した一次発酵処理施設。畜産ふん尿に十分な空気を混ぜ合わせ、発酵させることで有害物質や草の種子などを分解させます。

（写真下）麦の収穫後に田んぼに堆肥を散布し、お米を育てるための、土づくりを行っています。

畜産堆肥を使用し、減化学肥料・減農薬で育てた特別栽培米を毎日の食卓に

（上）特別栽培米「洲の舞」の生産農家（下）商品パッケージをデザインした地元の高校生と短大生

ＪＡくるめでは、畜産堆肥を肥料として使用する一方で、減化学肥料や農薬を大幅に削減して生産した特別栽培米を久留米の新しいブランド農産物として販売しています。

「ごはんは毎日食べるもの！安全、安心、おいしいお米を食卓に」をキャッチフレーズに、品種や産地ごとに「ほとめき（品種：夢つくし、産地：善導寺町）」、「くる米紀行（品種：つくしろまん、産地：山川町）」、「高良の郷レンゲ米（品種：夢つくし、産地：高良内町）」、「洲（しま）の舞（品種：ヒノヒカリ、産地：宮ノ陣町）」の名称で販売しています。なかでも、平成19年に販売を開始した「ほとめき」と「くる米紀行」は地元の高校生、短大生の考案による商品パッケージデザインを採用しています。

また、ＪＡにじの「耳納連山れんげ米」も特別栽培米です。